

職員・学生・教育、(5) 言語、(6) 調査。

ところで、東南アジアの大学の過半数は、第二次大戦後に設立されたものであり、特に最近、高等教育就学者の量的増加率は、めざましい。この高等教育の驚異的發展の原因を、著者は、(1) 戦前における中等教育の発達、(2) 日本軍の進軍に伴い教育の重要性を高く評価したこと、(3) 新興独立国が教育費への支出を大幅に認めたことなどに求めている。

とくに、第二章では、ビルマ、タイ、カンボジア、ヴェトナム、ホンコン、フィリピン、インドネシア、マラヤおよびシンガポールにおける諸大学の概要を紹介的に述べている。第五章の言語問題については、母国語の台頭を指摘している。すなわち、過去は、教授用語として、英語・フランス語・オランダ語・タイ語の四ヶ国語であり、宗教教育面において、パーリー語・アラビヤ語・ラテン語が使用されていたに過ぎなかった。ところが、現在では、オランダ語が衰退した反面、ビルマ語・クメール語・ヴェトナム語・シナ語・マレー語が、抬頭してきている。

本書の論旨は、東南アジアの諸大学が、欧米先進国の制度の単なる模倣であってはならず、あくまでも東南アジア独自の文化的土壌に適合した教育制度を確立することにあると思われる。

なにはともあれ、本書は、啓蒙的、示唆的なものを多分に含んでいるのみならず、類書の稀少性からも、好個な労作たりうると信ずる。(門前貞三)

F. M. LeBar and others; *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. HRAF Press, New Haven, 1964, x+288 p.

本書は Human Relation Area Files に所属する LeBar 博士を中心に G. C. Hickey, J. K. Musgrave 両氏のほか何人かの専門家が協力して、G. P. Murdock 的方法論にもとづいて執筆され、編集されたものである。

南中国、インドのアッサム地方、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジア、ヴェトナム、マレーシア（マレー半島）にわたる現在までに出版された数多くの論文や書籍、さらにそれら各国で仕事をしたフィールド・ワーカーとの文通などにより集積された資料を基礎に作成された本である。

内容を大別すると、第一部 Sino-Tibetan, 第二部 Austroasiatics, 第三部 Tai-Kadai, 第四部 Malayo-Polynesian に分かれていて、各部はさらに細かく分類されている。扱われている民族集団は約 156 にもおよび、おのおの社会・文化について触れている。

断片的な資料を古今東西の文献から採集して、このような形で集大成した編者たちの努力はたいへんなものであったと思われる。また同時に HRAF にも見られるようなアメリカにおける文献利用の組織能力には驚嘆せざるをえない。このような豊かな資料にくわえて文献目録や美しい色ずりの大型民族分布図はたいへんに親切なものであり、役に立つ。すでにその民族分布図はタイ国政府の山地民関係の出先機関では利用を始めている。端的にいうとこの本は大陸部東南アジアの民族に関する百科辞典的性格を持つものといえよう。

しかしながら、編者や筆者が複数なうえに、断片的な資料を文献から集成したために、内容的にはいささか不統一のきらいがある。それに百科辞典的な書物が持つ無味乾燥な傾向はさげがたいようである。そのため、できのよい民族誌を読んでいるように通読して面白いというたぐいの本ではない。また引用文献が英語に片よっているのも将来是正されなければならないであろう。

以上のような問題はあるにせよ、主任編集者の Le Bar 博士は意欲的に現在おこなわれている東南アジアにおけるフィールド・ワークの成果をさらに取り入れ、何年か先には本書の改訂版を出すことを希望していると述べているので、この本がやがて大陸部東南アジアの民族誌の“決定版”として成長してゆくことが期待できる。その意味で、本書がこのような形で出版されたことは意義深いといえよう。この種の地味な仕事に取り組まれた編集者たちに敬意を表したいと思う。

いずれにせよ本書が人類学者をはじめとする東南アジアの地域研究者にはたいへんに便利で有益な本であることは間違いはない。とりわけ研究室には不可欠の本であろう。(飯島 茂)

Nguyen Thai: *Is South Vietnam Viable?* Manila, 1962. xii+314 p.

南ベトナムの情勢は、ここ数年表面的にはいくつかの大きな変化を示した。けれども、国際政治の Sub-